

風に祈る

—五風十雨—



「雨甘く、風やわらか和にして」—

風日祈祭で奏上された、昔の祝詞の一節。

風日祈祭は、天候が順調で、五穀が豊穰であるよう祈る神事で、現在では五月十四日と八月四日の二度、外宮・内宮その他の宮社で執り行われる。

古くは「日祈内入ひのみうちいれ」という神職によって、七月朔日から八月晦日に至るまで毎日行われていたという。そして彼らが主として奉仕したのが、風の神を祀る内宮の風日祈宮と外宮の風宮であった。

旧暦八月一日の「八朔はつしゅく」は「二百十日」、「二百二十日」とともに古くから台風が来襲する確率が高いため、農家にとって最も警戒するべき厄日とされてきた。この時期は稲の花が咲き穂を出し始める頃であり、暴風雨があると稲作が大きな打撃をうける。そのため農村では直前か当日に風祭りを行ったり、風除けの呪まじないをしたりした。一般的な風除けの祈祷には「風切鎌」といって古鎌が使われるが、五月の風日祈祭では雨具である蓑と笠が供えられる。

—「五風十雨ごふうじゅうう」—この言葉もまた、風日祈祭で唱えられた。

五日に一度風が吹き、十日に一度雨が降ることで、農作に都合の良い天候であることをいい、転じて、世の中が太平なことを示す。蓑笠を供える風日祈祭では、風雨を忌み嫌うのではなく、それもまた恩恵として受け入れているのである。

外宮の風宮、内宮の風日祈宮は、鎌倉期の元寇の際、神風を吹かせて蒙古軍を全滅に至らせ、その功績によって別宮に昇格した。

昭和34年の伊勢湾台風の際には、風宮だけが倒れた大木で屋根が割れるという被害を受けた。それはまるで自らを犠牲にして、神宮の宮社を守るかのようなだったという。

自然の脅威に驚かされる出来事が数多くある。

古代の人々が神と崇めたのは、山や森、海といった自然であり、それら大自然への感謝や畏怖から、信仰は生まれた。

現代に生きるわたしたちは、どうであろうか。

- 伊勢神宮 知られざる杜のうち (矢野憲一/著 角川書店 L174/ヤ)
- 伊勢神宮 神の森に参る旅 (ランダムハウス講談社 L174/イ)
- 伊勢神宮ひとり歩き (中村葉子/著 中野晴生/写真 ポプラ社 L174/ナ)

